

20世紀初期英国の女性の新職業としての女性庭師の誕生と活躍 ー英国の女子園芸学校レイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校の教職員の視点からー

Women Gardeners in Early 20th Century Britain: Three Wardens at Lady Warwick's College, Studley

橘 セツ*
Setsu TACHIBANA

Abstract

This paper explores the development of the new profession of women gardeners in early 20th-century Britain focusing on a horticultural school, Lady Warwick's College, Studley. The College was founded by the Countess of Warwick, Frances Evelyn Greville (1861-1938) in Reading in 1898, when it was initially known as the Lady Warwick Hostel. The college moved to Studley Castle in 1903. It offered a high standard of practical training and education for women in horticulture and 'the lighter branches of agriculture'. The paper looks at the experience of one Japanese horticultural student, Taki Handa, and their view of Lady Warwick College from 1906 to 1908. The paper also looks at how the college developed to offer professional training and education for women, and especially considers the period of the first three wardens: Edith Bradley, 1898-1905; Mabel Faithfull, 1905-1908; and Lillias Hamilton, M.D., 1908-1922. The paper looks at how these first three warden's tenure periods (1898-1922) involved dynamic social change for women in Britain, especially during the First World War. The paper evaluates the women who attend this college, who might be referred to as "a new-fashioned woman gardener in breeches and such-like" (by Agatha Christie in 1920) or "the Daughters of Ceres".

キーワード：英国, 女性庭師, 女性のための農業園芸訓練教育, 「農業のより軽い部門」, 女性の職業

I はじめに

20世紀初期, 英国において中産階級の女性が職業的に活躍する機会に限られていたが, 女性の人材育成・キャリア形成の上で, 園芸やガーデニングに関する学校で提供される知識と技術は, 女性をエンパワーしてきたことが最近の研究では明らかになっている (Opitz 2014など)。園芸知識と技術を訓練する女子園芸学校が, 19世紀末から欧米を中心に設立されはじめ, 農場や庭園に

* 関西国際大学 国際コミュニケーション学部

附設される非公式な小規模ガーデニングスクールや私塾まで含めると、欧米諸国からコロニアルなつながりのある地域を中心に世界各地に設立される社会運動となった。このような女子園芸訓練学校の入学者として想定されていたのは、「ジェントルウィメン（‘gentlewomen’）」あるいは「専門職家庭の娘たち」とされる上流・中産階級層の自活・自立が必要な女性たちであった。女性庭師は、そのような上流・中産階級層の女性たちが新たに担うような「リスペクタブルな」職業になりうると議論されていた。

さらに、19世紀から20世紀にかけての英国では、都市化が急激に進んでいたが、その反動として、カントリーサイドを見直し田舎の土地に回帰する運動（‘the back to the land movement’）も同時に進行していたとレイモンド・ウィリアムズの論を引きながら文化史学者のジュディス・ページとエリーズ・スミスは論じている（Page and Smith 2021: 174）。米国の科学史学者のドン・オピッツも20世紀初期の英国における女性のための農業・園芸学校教育の最も重要な理念とキーワードの一つは「土地に回帰せよ（‘Back to the land’）」であるという観点から論じている（Opitz 2014）。

ところで、園芸・農業訓練学校で学ぶ女子学生たちの園芸知識（花卉・野菜・果樹栽培や養鶏・酪農・養蜂・園芸農業経営学など）の専門性は、多くの学校が連携していた英国王立園芸協会（Royal Horticultural Society, London）によって担保されていた。多くの園芸訓練学校の教育課程の修了にあたっては、英国王立園芸協会から派遣された試験官によって試験（Royal Horticultural Society General Examination）が実施され、合格者には資格が認定された。このような資格を得た園芸訓練学校の卒業生は、園芸の世界では指導的な役割が期待されていた。女性のための農業・園芸学校教育現場では、女性が担う農業の分野について「農業のより軽い部門（‘the lighter branches of agriculture’）」という用語がよく使用された。本稿では、この「農業のより軽い部門」も一つの鍵概念として分析する。

本稿では、このような女子園芸訓練学校に関わる教職員・学生・卒業生の活躍のネットワークと彼女たちの思考について、当時、英国において刊行されていた園芸雑誌や女子園芸学校誌からアプローチを試みる。本稿は、英国の私立女子園芸学校レイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校（Lady Warwick's College, Studley）に1906年から1908年まで留学した日本人女性園芸家半田たき（1871-1956）の経験を手がかりとして、彼女が留学中師事した教師や同級生たちは、その後の人生において女性専門職である女性庭師として園芸や庭園にどのように関わったのかについて、彼女たちの教育思想と実践を中心としたライフヒストリーから考察する研究の一端である^{注1}。

半田たきが学んだレイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校は、英国貴族ウォリック伯爵夫人フランセーズ・イヴリン・グレヴィル（Countess of Warwick, Frances Evelyn Greville: 1861-1938）が1898年にイングランド南部の都市レディング（Reading）に設立した女性のための園芸訓練学校レイディ・ウォリック・ホステル（Lady Warwick Hostel）が発展した学校である。レイディ・ウォリック・ホステルは、1903年にウォリックシャーのスタッドリー城にキャンパス移転し、レイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校と改称した。半田たきが留学を開始した1906年は、キャンパスがスタッドリー城に移転してから3年目であった。設立者のウォリック伯爵夫人は、創立から1908年まで学校経営に携わった。

レイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校では、教育現場のトップの役職者は学寮長（warden）と呼ばれた。半田たきがレイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校に留学

中に師事したのは、第2代学寮長メイベル・フェイスフル (Mabel Faithfull, 学寮長任期は1905-1908年) であった。本稿では、初代学寮長エディス・ブラッドリー (Edith Bradley, 学寮長任期は1898-1905年)、第3代学寮長リリアス・ハミルトン (Lillias Hamilton, M.D., 学寮長任期は1908-1922年) も含めて3人の女性学寮長の教育思想と実践に焦点を当てて考察する。これら3世代の学寮長のライフヒストリーと教育実践の系譜を考察することによって、半田たきが留学して学んだ女子園芸学校は、当時の社会の中でどのような役割が求められた学校であったのかという問いの答えに接近する。

次の第II章では初代学寮長エディス・ブラッドリー、第III章では第2代学寮長メイベル・フェイスフル、第IV章では第3代学寮長リリアス・ハミルトンに焦点を当てる。第II・III・IV章では、ウォリック伯爵夫人が1898年にレディングに創立した女子園芸訓練学校レイディ・ウォリック・ホステル時代 (1899-1903年) から、キャンパス移転を経てレイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校時代 (1903-1908年)、さらに創立者ウォリック伯爵夫人の手を離れ1908年に学校名をスタッドリー農業園芸女子カレッジ (Studley Agricultural and Horticultural College for women) へと変更し、第一次世界大戦時を経て1922年まで学寮長の役職にあった3人の指導的な女性教師の視点を学内雑誌の記事を中心に紹介し、読み解きながらたどる^{注2}。

その道筋は、20世紀初期に女性が社会における権利を求めて連帯し、特に女性参政権を求めて激しい運動を繰り広げたサフラジストやサフラジェットの時代の文脈と大きくクロスする^{注3}。同時に、1914年から1918年までの第一次世界大戦時に、農業労働を担っていた男性の多くが兵士として出征する中で、英国土全域にわたって、空洞化した農地で女性も労働することが、銃後を守る活動とされ、やがて女性農耕部隊 (Women's Land Army) が組織されることとなった。

II 初代学寮長エディス・ブラッドリー (任期は 1898-1905 年) の教育思想と実践

エディス・ブラッドリーは、レイディ・ウォリック・ホステル・レディング校の創立の時から、1903年にウォリックシャーにあるスタッドリー城にキャンパス移転を経て1905年まで初代学寮長をつとめた。レイディ・ウォリック・ホステルでは、創立当初から校内雑誌『女性農業タイムズ *The Woman's Agricultural Times*』を刊行した。表紙には、「ウォリック伯爵夫人編集 (Edited by the Countess of Warwick)」と記されているが、初期の多くの記録や記事はブラッドリーの尽力によるところが大きいと考えられる。

1899年7月に刊行された『女性農業タイムズ』Vol. I -No. 1の創刊号をみてみよう。創刊号は、薄緑色の表紙で左側の縦にアール・ヌーボーのデザインでローマ神話の農業女神のケレス Ceres が麦の穂を抱いた図像が描かれている。創刊号表紙には、雑誌の値段は、「1冊1ペンス；郵送の場合は年間1シリング6ペンス (Price 1d; by post 1s.6d.per Annum.)」と明記されている。創刊号には、ウォリック伯爵夫人の署名記事として、巻頭に「新しい女性たちと古い土地 *The New Women and the Old Acres*: [By the Editor [Frances Evelyn Warwick]p1-2]」が掲げられている。この記事を含む創刊号のラインナップは以下の通りである：

新しい女性たちと古い土地 *The New Women and the Old Acres*: [By the Editor [Frances Evelyn Warwick]

女性と農業 Women and Agriculture [By Sir James Blyth, Bart]

ケズウィック工芸学校 The Keswick School of Industrial Arts [Cannon Rawnsley]

見捨てられた場所をどのように美しくするのか How to Beautify the Waste Places [By Earl Grey]

女性のための養鶏 Poultry Keeping for Women [By Edward Brown, F.L.S.]

アイルランドの組合運動 The Co-operative Movement in Ireland [By Mr Horace Plunkett, M.P.]

科学と農業 Science and Agriculture [By Professor Meldola]

女性のためのガーデン仕事 Garden Work for Women [By William Paul, F.L.S.]

観察の力 The Power of Observation [By J. Marshall Dugdale]

私たちケレスの娘たち Our Daughters of Ceres [By the Hostel Warden.]

掲載記事は、科学的な視点も取り入れて農業・園芸・ガーデン・養鶏についての仕事は、女性の携わる専門職・女性庭師の活躍フィールドとして可能性に満ちていることが力説されている。寄稿者とテーマは幅広く、例えば、「ケズウィック工芸学校」(p3-4)の記事の寄稿者ローンズリー司祭(Cannon Rawnsley)は、英国の湖水地方を拠点に、開発で失われ行く自然を危惧して、自然保護のための運動を推進していた当時のキーパーソンである。ローンズリー司祭は、具体的には、湖水地方鉄道敷設反対運動にたずさわって、1895年に自然保護に関わる公益団体ナショナルトラスト(National Trust)の3人の創始者の一人となった指導的な人物である。ローンズリー司祭による湖水地方にあるケズウィック工芸学校についての記事には、「より陽気なイングランドへの嘆願(A Plea for Merrier England)」との副題が記されていて、工業化が押し寄せる風潮に抵抗して手仕事による工芸製品のつくり手の組織的な育成による地域経済の活性化の実践について論じているが、そこには女性の活躍の可能性があることが記されている。

この創刊号で学寮長ブラッドリーが担当したのは、「ホステルの学寮長による(By the Hostel Warden.)」の署名のもとで「私たちケレスの娘たち」というタイトルの学生の学内活動や消息記事・人物往来記事である。「私たちケレスの娘たち」の記事表題には「あるいは、ホステルの学生に関わる事項(or Matters concerning the Hostel Students)」(p9)との副題が記される。学内雑誌の創刊号以降の号も読み進めると、今後この学内雑誌の最も重要な核となる部分はこの「私たちケレスの娘たち」の部分だと解釈できる。創刊号以降、学寮長は、毎号丁寧にこの「私たちケレスの娘たち」のコーナーを執筆している。1899年7月から創刊し、途中2回学内雑誌の名称を変えながら、多い年には毎月1回の刊行で年に12回、後には年に6回ないしは季刊(年4回)となりながらも、この在学生・同窓生の近況を伝える「私たちケレスの娘たち」のコーナーは続いた。この「私たちケレスの娘たち」記事コーナーのおかげで、学生たちは卒業後もお互いに近況などの情報交換をすることができ、女性庭師として園芸や農業などの仕事に携わっている女性たちの同胞の絆やネットワークの源となる。この学校に関わった在学生・同窓生たちをローマ神話の農業女神ケレスの名を語り「私たちケレスの娘たち」と呼称することで、女性庭師として同じ目標に向かって邁進する女性たちの懇親やお互いに助け合うような連帯の紐帯が生まれる場所となっているとみることができる。

学寮長ブラッドリーは、学内雑誌『女性農業タイムズ』において、1900年2月ごろから、「私たちケレスの娘たち」の執筆以外にも、以下のように女性と農業の専門分野について活発に署名記事を寄稿する：

農業協同組合と女性 'Agriculture Co-operation and Women' (Vol II-No 8 : 1900 Feb: p4-5)

女性庭師：20世紀における彼女たちの場所 'The Woman Gardener: Her place in the Twentieth Century' (Vol II-No 8 1901 Feb P1-2)

女性のための農業・園芸カレッジ 'A Woman's Agricultural and Horticultural College' (Vol II-No12 June 1901)

教育的フラワーショウ 'Educational Flower Show' (Vol III-No 3 September 1901)

農業のより軽い部門における女性への門戸解放 'Opening for Women in the Lighter Branches of Agriculture' (Vol III-No 4 October 1901)

コーディネート募集中!! なんの? すべてのことにおいて, 特に農業のことにおいて 'Wanted Co-ordination!! In what? In all Things, especially Things Agricultural' (Vol III-No 6 December 1901)

学寮長の誕生日のお祝い 'The Warden's Birthday Celebration' (Vol III-No 6 December 1901)

果実の濃縮, その成功の可能性 'Fruit Evaporating, can it be made a Success?' (Vol III-No 7 January 1902)

ウォリック城における学会: 南アフリカ拡張委員会 'Conference at Warwick Castle: South Africa Expansion Committee' (Vol III-No10 April 1902)

レイディ・ウォリック・ホステル, 新しい発展 'Lady Warwick Hostel, a New Development' (Vol IV-No 1 July 1902)

ネイチャースタディ博覧会を垣間見る 'A Glance at the Nature Study Exhibition' (Vol IV-No 2 August 1902)

園芸農業学校のキャンパスを開学の地レディングから新キャンパスのスタッドリー城に移転させた後は, 学内雑誌『女性農業タイムズ』の表紙のデザインも変更された。Vol V-No 1 (January 1904) からの新表紙のデザインは, 明るい緑の表紙となり, 校舎となるゴシック・リバイバルの建築様式のスタッドリー城の全景が表紙のイラストとして添えられるようになった。表紙もあらたに新装『女性農業タイムズ』となってからは, 学寮長ブラッドリーは, カントリーマーケット (Country Markets) についての2回続きの記事を含め「農業のより軽い部門 "The Lighter Branches of Agriculture"」をキーワードに言論活動を行う:

カントリーマーケット: 「農業のより軽い部門」における重要な場所 'Country Markets: The important place that could occupy in "the lighter branches" No 1' (Vol V-No 1 January 1904 p.39)

カントリーマーケット: 「農業のより軽い部門」における重要な場所: エヴァンシャムでの事例 'Country Markets: The important place that could occupy in "the lighter branches" No 2 Evesham (Smithfield)' (Vol V-No 2 April 1904 p.88)

特別記事: 農業についてのグロスター会議: 農業教育者を誰が教育するのか Special Article: The Gloucester Conference on Agriculture: Who is to educate the agricultural educator?' (Vol V-No 4 October 1904)

村の図書館 'Village Libraries' (Vol V-No 4 October 1904 p212)

農業のより軽い部門は女性にとって最も見込みのある職業: 需要は供給よりもずっと多い

The Lighter Branches of Agriculture as a Most Promising Profession for Women: the Demand being Greater than Supply. (VI-1 January 1905 p3-7)

過去に学生が取り組んだ「農業のより軽い部門」における実用的経験についての会議
Conference on the Practical Experiences of Past Students engaged in "The Lighter Branches of Agriculture" Studley Castle, July 20th 1905 (VI-3 Summer 1905 p123)

学寮長ブラッドリーは、同僚の副学寮長のベルサ・ラ・モーセ (Bertha La Mothe) と共著で、女性のための図書 (*The Womans Library*) 叢書の一巻として著書『農業のより軽い部門』をチャプマン・アンド・ホール出版社 (Chapman & Hall Ltd) から1903年に刊行する。本書は、全体で346頁あり、レイディ・ウォリック・ホステルの教育現場についての写真図版や図解も豊富で、ブルーのクロス装丁の表紙は、アール・デコの美しいデザインとなっている。ウォリック伯爵夫人が本書の序文 (pp. xiii-xx) を執筆している。

本書の目次は、「市場園芸 Market Gardening；果樹栽培 Fruit Growing；酪農 Dairying；養鶏 Poultry Keeping for Utility and Egg Production；養蜂 Beekeeping；農産物のマーケティング、全体ポジションへの鍵 The Marketing of Produce, a key to the whole position；女性の農業セトルメント Women's Agricultural Settlements」となっており、ブラッドリーの考える『農業のより軽い部門』とは、学内雑誌で繰り返し論じているように、野菜や花卉栽培などの市場園芸・果樹栽培・酪農・養鶏・養蜂などにおいて、市場の需要にマッチした農産物のマーケティングに基づいた小規模な市場園芸を目指す科学的な視点が盛り込まれている。特に、最終章は、女性による農業セトルメント活動による共同体の可能性を語る野心的なものであった^{注4}。

『農業のより軽い部門』は、園芸について適切な訓練を受けた女性が職業として、生業として確実に成り立つための小規模な園芸・農業の方策について説く手引書であり、レイディ・ウォリック・ホステル (1899-1903年)、レイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校を通じて教育理念そのものであった。

さらに、ブラッドリーは、「農業のより軽い部門は女性にとって最も見込みのある職業 'The Lighter Branches of Agriculture as a Most Promising Profession for Women」をテーマに1905年2月3日午後5時30分から、当時の最新メディアである視覚に訴えるランタン・スライドを上演しながら講演を行なった。ブラッドリーは、ブリストル大学のロイド・モーガン博士 (The Principal, Dr Lloyd Morgan, LL.D. & F.R.S.) にも講演を依頼した。ブラッドリーによる講演活動の趣旨は「農業のより軽い部門」において「訓練された女性の需要は供給を上回っている (The Demand for Trained Women is in excess of the Supply.)」ことを広めることであった。「農業のより軽い部門」において訓練すれば、女性庭師のような専門職に就くことにつながり、「需要は供給を上回っている」ので、女性にとって将来性のある職業となっていることを強調している。校内雑誌『女性農業タイムズ』の Vol VI-No 1 (January 1905) には、講演と同様の趣旨のブラッドリーによる署名記事「農業のより軽い部門は女性にとって最も見込みのある職業：需要は供給よりもずっと多い ('The Lighter Branches of Agriculture a Most Promising Profession for Women: the Demand being Greater than Supply.」(p3-7) が掲載されている。このようにブラッドリー学寮長は、女性にとって職業としても将来性の豊かな小規模な園芸農業への参入について、書物刊行や講演活動で呼びかけ、女子農業・園芸学校の有用性を広報する活動に焦点を当てた。このようなブラッドリー学寮長の

言論活動は、女性運動の活動としてもエネルギーに満ちていた。

一方、スタッドリー城への学校移転を経て、学務をめぐり教育現場の理想的な充実をはかることの主張と資金不足の状況のはざま、ブラッドリー学寮長は、創立者ウォリック伯爵夫人との間で、意見の相違が生じた。その結果、ブラッドリーは、1905年8月にレイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校の学寮長の職を、ウォリック伯爵夫人によって解任されてしまい、ブラッドリーは離職した^{注5}。

その後、ブラッドリーは、農業・園芸分野での実践を蓄積するなかで、独立して小規模な私立女子園芸学校をケント州のグリーンウェイ・コート、ホリングボーン（Greenway Court, Hollingbourne）に1910年頃につくり、1917年頃まで自ら運営した。スタッドリー・カレッジの1910年以降の後続雑誌『ギルドについてのニュース *News about the Guild*』を確認すると、1911年ごろから、ブラッドリーのはじめた新しい女子園芸学校について、半頁ほど費やした広告が数度にわたって掲載されている。グリーンウェイ・コート園芸学校では、寄宿か通学が選択でき、小規模土地所有者が効率的な土地利用ができるような園芸農業、酪農、チーズやバター作り、養鶏、養蜂、果物の瓶詰めなどの加工品作り、マーケティング、乗馬や運転などのレッスンなど多岐にわたって学ぶことができると広報されている。1911年の『ギルドについてのニュース』の広告では、ブラッドリーがレイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校において、元学寮長であったことも明記されている^{注6}。1911年後半の広告では、新たに経験豊富なフランス人を雇いフランス庭園についてのコースも追加して、ブラッドリーの運営する園芸学校を充実させたことが記される。さらに1912年に『ギルドについてのニュース』に掲載された広告を見ると、ブラッドリーの運営する園芸学校は、寄宿学生のための宿泊設備を充実させたことが記される。ブラッドリーの運営するグリーンウェイ・コート園芸学校の広告が掲載された『ギルドについてのニュース』の同じ頁には、養鶏をしている卒業生の鶏卵についての広告や、他の関係者が運営するガーデニング学校の広告、養蜂の設備の広告など多彩な紙面となっている。

Ⅲ 第2代学寮長メイベル・フェイスフル（任期は1905-1908）の教育思想と実践

初代学寮長ブラッドリーが、創立者ウォリック伯爵夫人によって1905年8月解任された後、第2代学寮長となったのは、メイベル・フェイスフル（Mable Faithfull）である。メイベル・フェイスフルは、1905年9月から1908年まで2代目学寮長をつとめた。

メイベル・フェイスフルは、著名な女性運動活動家エミリー・フェイスフル（Emily Faithfull: 1835-1895）のいとこであると称された。メイベル・フェイスフルは、1913年3月12日に逝去し、学内雑誌『ギルドについてのニュース』の Vol V-No 2（May 1913）の冒頭に、追悼記事が掲げられている。この記事には、メイベル・フェイスフルの妹のアミー・フェイスフル（Amy Faithful）が、メイベルの来歴について記しているのが、引用しながら彼女が、1905年にレイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校の学寮長になるまでのライフヒストリーを紹介する。この追悼記事にも、メイベル・フェイスフルの生年は記されていない。フェイスフルは、ハーツフォードシャー（Hertfordshire）の古い家系フェイスフル一族のブロックスボーン（Broxbourne）のフランシス・フェイスフル（Francis G. Faithful）の3番目の娘として6人姉妹の一人として誕生した。彼女は、家庭で教育をうけた。彼女の叔父にあたる教育者のチッテンデン牧師（the Rev. C. Chittenden, at

The Grange, Hoddesdon) によって家庭教育が授けられた。1890年にメイベルは、昆虫学者であり自然科学者のアリス・バルフォア (Alice Balfour) の私設秘書をつとめることになった。アリス・バルフォアは、国会議員のアーサー・バルフォア (Arthur Balfour, M.P.) の妹であった。1893年、彼女は労働委員会 (the Labour Commission) の女性事務員のスタッフに加わった。1894年に彼女はウィンチェスターハイスクールの寄宿舎であるウィンチェスターのハイハウス (the High House) の長となり、1904年までそこにとどまった。ロンドンでの仕事とインド滞在の後、彼女は女性のためのレイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校の学寮長に任命された。そこでの働きは、追悼記事には、「カレッジの発展と学生の利益に心から身を捧げ、かれらの多くは彼女の親しい友人になった。」と記される。

学寮長フェイスフルのここまでの来歴をみると、彼女は園芸や農業のバックグラウンドがあるというより、女性科学者アリス・バルフォアの私設秘書をつとめ、労働委員会の女性事務員として働いた経験を活かして、学務のマネージメント業務の能力に期待して、ウォリック伯爵夫人はフェイスフルを学寮長に任命したと考えられる。

フェイスフル学寮長の時代に、カレッジのカリキュラムとして、酪農、園芸、市場園芸、養鶏、養蜂、果樹栽培、市場調査などに、植民地での農業起業・就職を目指した訓練「コロニアル・トレーニング・スキーム (a colonial training scheme)」や主婦の家庭管理を主眼とした「主婦コース (a housewife's course)」, ジャムや瓶詰めなどの加工品作りのマネージメントなども付け加わり、多彩となった。これは、解任されたブラッドリー学寮長が、事前に整えておいたものでもと考えられる。

学校は2年の課程となり、1年目は、午前中は座学、昼からは指導者について学内実習する。2年の課程が終わる時に王立園芸協会の認定試験を受けて、合格すれば、認定資格を得る。

この2代目学寮長メイベル・フェイスフルの在任時代に、レイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校に1906年から1908年まで、日本から留学したのが半田たき (1871-1956) である。図1の集合写真は、半田たきが帰国後にまとめたファミリー・アルバムにおさめられていた写真である。写真の裏にはたきが自筆で「明治四十年頃英国ウォリック州スタッドレ村ニ在ルスタッドレー・カレッジニ於ケル校長諸教授学生全部の撮影」と記している。

この集合写真において、学寮長のフェイスフルは、前から2列目の左から5番目の人物で白いケープを纏っている、最も目立った風貌の人物だと推察できる。さらに、半田たきのまとめた手づくりのこのファミリー・アルバムには、ロングスカート姿で白馬に乗るフェイスフル学寮長のスナップ写真があり「校長 ミス・フェースフル 玄関前ニテ」と、たきが手書きのキャプションを記している。

フェイスフルが学寮長をつとめている間の学内雑誌は、タイトルとデザインが前学内雑誌から更新された。雑誌名は『スタッドリー・カレッジ農業ジャーナル *Studley College Agricultural Journal*』と変更され、1905年12月号から Vol 1-No 1 として創刊された。この形式は1908年9月号の Vol III-No12で、最終となった。この雑誌刊行の期間は、フェイスフルが学寮長をつとめていた期間と重なっている。フェイスフル学寮長の時代も「カレッジ・ノート (College Notes)」や「同窓生からのニュース (News from Old Students)」などの同窓生の情報交換の記事が豊富である。特筆すべきは、新入生の一人一人のカレッジへの到着を丁寧に報じていることだ。たきが到着したことを報じるのは『スタッドリー・カレッジ農業ジャーナル』 Vol II-No 5 の1906年12月号で



図1半田たきが Lady Warwick College, Studley に留学時に撮影された教師・女子学生の集合写真
(出典：星珠枝のご好意による提供，中目家が所蔵する中目（旧姓半田）たきの「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」；星珠枝・橘セツ「園芸家半田たきの明治後期の英国留学：家族史とライフヒストリー／ライフジオグラフィーの視点から」『神戸山手大学紀要』第13号，97頁，2011所収）

ある。この号に何が掲載されているのか具体的にみてみよう。「カレッジ・ノート」(p 2)のコーナーにおいて、1906年の新学期は9月20日に始まり、月曜日にイーグルトン (W. Iggulden) が初めの講義を行ったことを報じる。1906年の秋学期は、37名の寄宿生のうち、18名が新入生である。何名かの学生は外国から来ていて、「早急に私たちの方法に馴染んできていて、言葉も流暢に話せるようになっていいる」と評す。直近の到着として「ミス・ハンダが、彼女の国のピクチャレスクなドレスを着て日本から直接やってきた。(Miss Handa, came straight from Japan in the picturesque dress of her country.)」と紹介されている。その後、新年度の学生の委員の投票が実施されたことが紹介される：

タームが始まってから10日後に上級生 (the Seniors) は集会室に集まって委員を選抜した。今年は、新入生には投票が許可されなかった。というのは、到着してからすぐの状態では、誰に投票していいのかわからないからだ。…ミス・プライス (Miss Price) が、学級長 (Head Student) に選ばれた。社会委員会 (Social Committee) はミス・克蘭 (Miss Cran) が委員長 (President) となった。ミス・リックス (Miss Rix) が書記 (secretary), ミス・アレン (Miss Allen), ミス・デ・パス (Miss de Pass), ミス・ボスウェル (Miss Boswell) が委員となった。図書委員会 (Library Committee) は、ミス・ケネディ・ベル (Miss Kennedy Bell) とミス・

ドムブレイン (Miss D'Ombrain) が選ばれた。図書室では、新しいカタログを作成している。古いものは役に立たない、というのは多くの書籍が行方不明になっているからだ。今後は、図書の注意深い監督が必要¹⁾。

続いて、学生は、引率されて近隣のヘイウェル (Hewell) 農場を訪問したことが記される：

新入生を率いて、ヘイウェルにて、初めの見学と園芸デモンストレーションが実施された：遊園地 (Pleasure grounds) は陽気に満ちており、バラは美しく咲き、とても楽しい日であった。2年生が、後日ヘイウェルに出かけた時は、そちらのご家族が在宅していたので、キッチンガーデンのみ見学することができた。私たちは、私たちの植えた「グロス・コールマン・グレーブ Gros Colman' grapes」の品種のグレーブが、その大きさと色彩において、優っていたので、誇らしかった²⁾。

社会委員会は、9月29日に実施された「休日の社交 (Holiday Social)」が大成功したことを記している。ホリデーにもスタッドリー校に滞在するスタッフと学生は、ハローウィンやクリスマスなど、それぞれの季節に応じた社会委員会が企画する寸劇・ダンス・歌唱・朗読などのエンターテイメントに参加して親交を深めた。どのような出し物があったのか、学内雑誌では、詳しく記されている。日本人留学生の半田たきもこのような出し物に参加して、出し物の出来を学内雑誌において評されている^{注7}。

園芸の実習においては、王立園芸協会 (Royal Horticultural Society) の展示会に出品して賞を競っている。学生を引率して、このような展示会に出かけるのも、学寮長の役割であった：

学寮長と多くの学生は、ヴィンセント・スクエア (Vincent Square) にある王立園芸協会 (Royal Horticultural Society) のフルーツ展示会 (Fruits Show) に参加した。「グロス・コールマン・グレーブ Gros Colman' grapes」の2枝が、2等賞となり、カレッジが賞を受けた。私たちは、この成功に、大いに満足した。というのは、この種の展示会では、とてもすばらしいフルーツが出品され、競争はとても激しく、2等賞でも、すばらしい名誉を受けたことになる³⁾。

学生たちは酪農の展示会にも出かけている：

ミス・ベインズ (Miss Baynes) と他の数人の学生は、乳製品展示会 (Dairy Show) に参加した。そこで、カレッジの古き友に出会った。ミス・ベインズが、ウォリックシャーの農業展示会 (Agricultural Show) で、彼女の出品した乳製品、クリームチーズで、銀賞を受賞した⁴⁾。

このように、日常の学びの成果を、園芸・農業展示会に出品して、賞を受けることで実感した。園芸と同様に、酪農についても、酪農協会が実施する試験を受けて合格することで、資格を得た：

この機会に表明してお祝いする。ミス・ホプキンス (Miss Hopkins) が、ブリティッシュ酪農ファーマーズ協会試験 (the British Dairy Farmers' Association Examination) のバター作

り (Butter-making) の理論と実践において合格した。そして、彼女はカレッジの酪農 (Dairy Farming) の資格 (certificate) も得た。今年、何人かの新しい学生も、このチームで乳製品作り (dairy work) を始めた⁵⁾。

このように、フェイスフルの編集した学内雑誌『スタッドリー・カレッジ農業ジャーナル』には、日々の学びの過程と成果が記録される。フェイスフル自身は、園芸・農業の実践的な訓練を受けている専門家ではなかったが、全体を見渡して学寮長として学校のマネジメントをしていたことが読み解ける。

カレッジにおいて園芸教育を担ったのは、園芸の専門講師スタッフであった。日本人留学生の半田たきは、園芸の授業について、彼女の自叙伝『思ひ出の記』に：

講師の中でも最も責任の重大なのは、園芸科のイーグルトン講師の様に思われた。時間数も一番多かった。而して只講義のみでなく実地の指導であった。1週に三日間は必ず学校に泊まれた⁶⁾。

と、記述する。学内雑誌にもイーグルトン (Mr W. Iggulden) 講師は、園芸記事を多く寄稿している。特にフェイスフルの学寮長時代に刊行された『スタッドリー・カレッジ農業ジャーナル』の創刊号1905年12月号から、ほぼ毎号およそ5頁にもわたる署名記事「ガーデニング・ノート ('Gardening Notes')」(W. Iggulden) を連載している。また、初代学寮長ブラッドリー時代の学内雑誌『女性農業タイムズ』にも、1900年6月号 (Vol I- No12) に共著で、「庭師としての女性 ('Women as gardeners')」(Hon. Mrs. Cecil & Mr W Iggulden) を寄稿している。

1908年にウォリック伯爵夫人がカレッジの運営から引退したのと同時に、フェイスフルも学寮長から退くことになった。その後も、フェイスフルは、女子教育の現場で活躍した。

Ⅳ 第3代学寮長リリアス・ハミルトン (任期は 1908-1922 年) の教育思想と実践

1908年から1922年まではリリアス・ハミルトン (Lillias Hamilton, M.D.: 1858-1925) が、第3代学寮長をつとめた。ハミルトン学寮長の時代は、1908年に創立者ウォリック伯爵夫人が大学運営から引退以降の時代である。したがって、学校名からも創立者ウォリック伯爵夫人の名前がなくなりスタッドリー農業園芸女子カレッジ (Studley Agricultural and Horticultural College for women) となった。しばらくカレッジは資金難が続いたが、1912年からは、英国の農業省 (Ministry of Agriculture) から補助金を得て、国との連携が強化された。カレッジは、農業省から補助金を得て、第一次世界大戦時を経て、女性農耕部隊などの国の政策と連携を深めることとなった。

第3代学寮長となるリリアス・ハミルトンは、『オックスフォード国民伝記事典 (Oxford Dictionary of National Biography)』にエントリーされているため、初代・2代の学寮長と比較すると生没年・来歴が比較的に明らかである。『オックスフォード国民伝記事典』では、彼女の職業を「医師・作家」と定義する。彼女は、スタッドリー農業園芸女子カレッジの学寮長を、50歳となる1908年から64歳で退職する1922年までつとめた。それでは『オックスフォード国民伝記事典』に記載されるリリアス・ハミルトンの来歴とキャリアを見ることにしよう。

リリアス・ハミルトンは、オーストラリアのニュー・サウス・ウェールズ州トマビル・ステーション (Tomabil Station) で、スコットランド、エアシャー出身の農夫ヒュー・ハミルトン (1822-1900) の8人兄弟姉妹の3番目の子として生まれた。ハミルトン一家は、リリアスが2歳の時、オーストラリアを離れ、スコットランドのエアシャーに戻った。移動の多い一家であったが、1874年にハミルトン家は、チェルトナムに移り住み、そこでリリアスは、チェルトナム・レディス・カレッジ (Ladies' College of Cheltenham) で4年間の学校教育を受けることができた。

卒業後のキャリアとして、ハミルトンは医療に関心を持ち、1883年からリバプールの労働収容所の診療所で看護師としての訓練を受けた。さらに、ハミルトンは、医師になることを決意し、1886年ロンドン女子医学校 (London School of Medicine for Women) に入学した。1890年に医学の内科医の資格 LRCP (Licentiate of the Royal College of Physicians) と外科医の資格 LRCS (Licentiate of the Royal College of Surgeons) をエジンバラ大学にて取得した彼女は、インド医務局のジュベール大佐と出会い、海外で働く機会を紹介された。ハミルトンは、ブリュッセルで医学博士号を取得し、すぐにインドのカルカッタへと旅立った。ジュベール大佐の紹介で、政府の任命も、宣教師や慈善団体の支援や保護も受けずに、ハミルトンはカルカッタにて開業医として成功を収め、一時期はカルカッタのレイディ・ダフェリン・ゼナナ病院の医務官を務めた。

1894年春、ハミルトンは、アフガニスタンのカブールに移った。ハミルトンは、アフガニスタンのカブールで6ヶ月を過ごすようにと首長から全額費用負担の招待を受けた。そこでは、ハミルトンは首長から、王妃に英国淑女の楽しみ方を教えるように依頼された。1894年10月にアミール (王族の称号) の治療に成功すると、ハミルトンはアミールの専属医となった。1896年後半になると、アフガニスタンでの仕事の緊張と絶え間ない危険に耐えかね、ハミルトンはアフガニスタンを脱出した。

イギリスに戻ったハミルトンは、ホームレスの女性たちの苦境に目を向け、1897年にリバプールでヴィクトリア女性居住区を共同で設立した。その後、彼女は個人開業に戻り、ロンドンに介護施設を設立した。ハミルトンは、南アフリカのトランスバールに2度行き、そこで兄弟と農場を設立した後、彼女は積極的な医療活動をやめ、再び旅に出た。

1908年、ハミルトンは、スタッドリー農業園芸カレッジの学寮長に応募し採用された。彼女のこれまでのキャリアを鑑みると、彼女は、開拓農業従事者の子女という農業のファミリー・バックグラウンドはあるものの彼女自身は園芸や農業の教育を受けた専門家ではなく、ましてや女性庭師ではなかった。しかしながら、彼女は医師兼作家として、彼女自身が、女子教育の黎明を通過しており、幅広いキャリアと見識のある50歳の女性として1908年に学寮長に応募して採用された。

ハミルトンは、1907年に女性参政権を求めて設立された「女性自由連盟 (the Women's Freedom League)」のメンバーとしても活躍した。文筆活動としては、ハミルトンはアフガニスタンについての経験をもとにした小説『宰相の娘：ハザラ戦争についての物語 *A Vizier's Daughter: A Tale of the Hazara War*』を著しジョンマレー社 (John Murray) から1900年に刊行した。ハミルトンは、学寮長になる前年の1907年に看護に関する著作『ナースの遺贈 *A Nurse's Bequest*』を執筆し、ジョンマレー社から刊行した。

第一次世界大戦中の1915年、英国の農業水産食糧省の農業漁業委員会 (Board of Agriculture and Fisheries) が、女性の農業教育について、スタッドリー・カレッジを含む24校のイングランドに

ある女子農業教育機関を調査し『農業教育会議レポート：女性のための農業教育 *Report of the Agricultural Education Conference: Agricultural Education for Women*』にまとめた。このレポートでは、ハミルトン学寮長が、スタッドリー・カレッジについて英国農業漁業委員会から諮問された。

このレポートに記されるスタッドリー・カレッジについての概況をみてみよう。1915年当時、カレッジは、園芸・農業（養鶏・酪農・一般農業）・家庭管理・植民地コースの4つのコースがあり、340エーカーの広大な農業園芸訓練のための敷地（牧草地・耕地・庭園・温室・遊園地（pleasure ground））を持つ。敷地に建つスタッドリー城が校舎であり、60人の寄宿学生が定員とされ、10人の教職員、12人の女性使用人がともに生活をする。学生は、中等教育修了後の16歳から入学が許可されたが、実際には18歳入学が推奨されていること、彼女たちは、寄宿部屋に応じて年間60から150ポンドの学費を払うとハミルトン学寮長は学校概要について説明した。学生の社会階層については、「ほとんどが職業人の娘で、大学進学には志向していないが生計を立てなければならない少女や、自分の土地を持っていてその管理方法を知りたいがっている少女がほとんどだ」とハミルトン学寮長は、続けて語る。スタッドリー・カレッジは、園芸・農業で自活できるように実用的な実践訓練・教育に力を入れており「カレッジは学生一人ひとりに対応し、将来のキャリアのことを相談し、個別のコースを用意」していることが強調され、卒業後のキャリアの実績と学校の設立目的について、次のようにハミルトンは説明した：

多くの卒業生は園芸を職業とし、たいていは成功した。何人かは植民地へ行き、そのほとんどは自分の土地を手に入れた。彼女たちには、独立する前にどこかで女性庭師の職を得ることを常に勧めている。…（中略）…カレッジを卒業したときに得られる給料は、年間約20ポンドから約60ポンドと幅があったが、もっと高い給料を得た者もいた。…（中略）…園芸に関しては、カレッジは、(a) 土地の所有者である、またはそうなる可能性のある女性が、自分の土地や庭園に実際的で知的な関心を持てるように訓練；(b) マーケティングに基づいて確実にビジネスとして利益を出す市場園芸（market-gardening）の全行程を実践する；(c) 私邸宅の庭園や公園で指導的な女性庭師になるための訓練；(d) 学校の教師となり、学校の庭園の世話をし、植物学や自然研究（nature study）の授業を受け持つ女性を養成するために設立された⁷⁾。

農業に従事する男性が出征したのちに、農業労働を担う女性は銃後の最前線の国防とされた。戦時の女性の農業・園芸労働の組織的な訓練の可能性について評価するために農業漁業委員会は、この『農業教育会議レポート：女性のための農業教育』を1915年にまとめた。のちに英国政府は女性農耕部隊（Woman's Land Army）を結成することとなった。

このレポートの中で、ハミルトン学寮長は一つの提言を述べている。スタッドリー・カレッジでは、それまでは、比較的豊かな家庭の女子を学生として想定していたが、女性庭師というキャリアを求めて、学費を払うことのできない家庭の女子の入学願書も相次ぎ、組織的な奨学金の制度を充実し、このような問題に対処することが急務であると訴えた。ハミルトン学寮長は、他の仕事には適さず、女性庭師の職につきたいが費用の問題で諦めなければならない女子学生が非常に多いと以下のように述べた：

この半年間に22人の女子生徒から奨学金の申し込みがあったが、現在のところカレッジには奨学金を支給する余裕はなく、近隣の州議会も奨学金を支給する用意はなかった。カレッジを小規模農家の娘たちの教育に活用できると考えたが、郡評議会はその組織を活用する用意がなくてできなかった⁸⁾。

第一次世界大戦中の1915年の一時期、ハミルトン学寮長は、カレッジを離れて、医師の専門性を活かして傷痍軍人救済委員会にボランティアとして医療サービスを提供し、バルカン半島のモンテネグロのボドゴリツァで病院を運営した。ハミルトン学寮長は、健康上の理由で1922年にスタッドリー・カレッジを退職した。

『オックスフォード国民伝記事典』では、後年のハミルトンの個性について次のように記される：

後年、彼女の風貌はさらに風変わりなものとなり、スタッドリー・カレッジの学生たちの嘲笑的となった。彼女が「神秘的な」東洋で長く過ごしたために身につけた超自然的な力を持っていると推測する者さえいた。リリアスは、非常に優れた写真家であり、才能ある針仕事家であっただけでなく、音楽、絵画、演劇を楽しんだ。彼女は結婚しなかった⁹⁾。

ハミルトンは、1925年1月6日、フランスのニースにあるクイーン・ヴィクトリア記念病院で逝去し、同地の英国人墓地に埋葬された。学内雑誌『ギルドについてのニュース』の1925年4月号(Vol XVII-No 1)は、ハミルトンへの追悼特集号となっている。

V おわりに

第3代学寮長ハミルトンの時代の1910年からはじまった後続学内雑誌『ギルドについてのニュース』の副題は、「レイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校の過去と現在の学生たちの絆を育むために1900年に設立されたケレスの娘たちのギルドのための雑誌 (*being the Magazine of the Guild of the daughters of Ceres, Founded in 1900 as a Bond of Union between Past and Present Students of Lady Warwick College, Studley Castle, Warwickshire.*)」と明記される。学内雑誌『ギルドについてのニュース』は、「ケレスの娘たち」と称される過去と現在におけるスタッドリー・カレッジの農業・園芸学校に関わった女性たちが連携して連帯する場所となっており同窓会雑誌の性格が強くなっている。

スタッドリー・カレッジを離職している初代学寮長ブラッドリーの私設女子園芸学校の広告が掲載された1911年の学内雑誌『ギルドについてのニュース』の役員を見ると、会長が1911年当時の3代学寮長ハミルトン、副会長とケレスの娘たちのためのギルドの創設者として初代学寮長ブラッドリーの名前があがっており、副会長が2代学寮長のフェイスフルとなっている(President: Miss Lillias Hamilton, Vice-President and Founder: Miss Edith Bradley, Vice-President: Miss Mabel Faithful)。『ギルドについてのニュース』の発行所はブラッドリーとなっている。このように初代から3代までの3人の学寮長が同時に集まり、協働して『ギルドについてのニュース』の運営を支えた。初代学寮長ブラッドリーが1900年に創始したと記される「ケレスの娘たちのため

のギルド」の学内雑誌『ギルドについてのニュース』のキャッチフレーズは、「二人は一人よりもよい（“Two are better than one”）」である。この3人の学寮長による協働は、第2代学寮長フェイスフルが、1913年3月12日に逝去するまで続いた。

そもそも、ギルドとはヨーロッパ中世に源を発する同業者組合であり互助組織である。カレッジの校舎スタッドリー城の建築様式も、ヴィクトリア時代に新築された中世のゴシック・リヴァイバルの建築様式であり、女性庭師の同窓組織としての名称ギルドも、中世の同業者組合・互助組織に名を借りた伝統の再創造と解釈できる。これは女子農業・園芸学校の訓練を受けた同窓の女性同士が「ケレスの娘たちのためのギルド」において、安心・信頼できる同胞との同業者コミュニティを形成し、女性庭師として、それぞれの方法で道を切り拓いていく中で、人と人のつながりを生み出し、培っていく力の一つとしてみることができ、あらたな社会関係資本の源となっている。

本稿で考察の対象としたカレッジの学内雑誌の記事をみると、女性庭師の活動はグローバルであり、英国の植民地を新天地とした農業経営を視野に入れた女性庭師の活躍が目指されていたことが理解できる。本稿で対象とした3人の女性学寮長の活躍は、英国の植民地をもフィールドにしておき、植民地で農業経営や医療活動をすることに疑問を抱かない当時の時代の文脈に沿った活動におさまっていた。本稿では、当時の英国の植民地を視野に入れた女性庭師の活躍の考察が十分にできなかった。次回の課題としたい。

<付記>

本稿は JSPS 科研費：20世紀初期英国の女性の新職業としての「女性庭師の誕生」をめぐる文化地理学的研究（基盤 C 課題番号23K01009 代表：橘セツ）の助成による研究成果の一部です。

【注】

- 注1 Tachibana, Setsu 'The "Capture" of Exotic Natures: Cross-cultural Knowledge and Japanese Gardening in Early 20th Century Britain' 『人文地理』66-6, 4-18, 2014; 星珠枝・橘セツ「園芸家半田たきの明治後期の英国留学：家族史とライフヒストリー／ライフジオグラフィーの視点から」『神戸山手大学紀要』第13号, 79-111頁, 2011; 橘セツ「英国貴族ウォリック伯爵夫人フランセーズ・イヴリン・グレヴィルの社会思想と女子農業・園芸学校の創立」『関西国際大学研究紀要』第24号, 85-100頁, 2023など。
- 注2 初期3代の学寮長の時代は、学寮長が交代する度に学内雑誌名も更新され、後続雑誌に引き継がれた：初代学寮長エディス・ブラッドリー時代の学内雑誌名は『女性農業タイムズ *The Woman's Agricultural Times*』（1899年7月 Vol I-No1-1905年9月 Vol VI-No3）；第2代学寮長メイベル・フェイスフル時代の後続学内雑誌名は『スタッドリー・カレッジ農業ジャーナル *Studley College Agricultural Journal*』（1905年12月 Vol I-No1-1908年9月 Vol III-No12）；第3代学寮長リリアス・ハミルトン時代の後続学内雑誌名は『ギルドについてのニュース *News about the Guild*』となる。『ギルドについてのニュース』は1910年からはじまり1922年までのハミルトン学寮長の時代をカバーして、1969年の閉学まで続く。筆者はレディング大学イングリッシュ・ルーラル・ライフ博物館（Museum of English Rural Life, Reading University）のスタッドリー・カレッジ・コレクション（Studley College Collection）に所蔵されるこれらの学内雑誌（資料番号 FR WAR 5）を閲覧した。
- 注3 女性参政権を求める運動の直接的関係の例としては、サフラジェット運動のキーパーソンであるエメリン・パンクハーストの三女アデラ（Adela）がレイディ・ウォリック・カレッジ・スタッドリー校で学んだことがあげられる。アデラは、母と二人の姉（クリスタベルとシルビア）を追って、女性政治同盟（WSPU）結成後、彼女自身も女性参政権を求める過激な活動を行った。彼女は、1914年オーストラリア

に移住し、活動を続けた。アデラ・パンクハーストについては、以下の伝記に詳しい：Coleman, Verna, *Adela Pankhurst: the wayward Suffragette 1885-1961*. Melbourne University Press, 1996.

- 注4 20世紀前半の女性による農業セトルメントによる共同体の実践運動については以下の論文が詳細に論じている：Meredith, Anne, 'From ideals to reality: The women's smallholding colony at Lingfield, 1920-39', *Agricultural History Review*, 54-I, 105-121, 2006. このような女性による小土地所有者による共同体の可能性についての記事も『女性農業タイムズ』に見られる：例えば、『女性農業タイムズ』創刊号の「新しい女性たちと古い土地 The New Women and the Old Acres」など。ブラッドリーもスタッドリー校を離職後このような共同体に一時参加している。
- 注5 この事情については、Horwood, Catherine, *Women and their Gardens: A History from the Elizabethan Era to Today*. Ball Publishing, 2010, p.290; Opitz, Donald L. 'Back to the land': Lady Warwick and the movement for women's collegiate agricultural education. *Agricultural History Review*. 62-1, 140-142, 2014などに詳しい。農業園芸共同体ブレドンス・ノートン地所 the Bredon's Norton Estate を運営するアメリカ合衆国出身の女性活動家ヴィクトリア・ウッドハル・マーティン Victoria Woodhull Martin とズーラ・モード・ウッドハル Zula Maud Woodhull はブラッドリー学寮長がレイディ・ウォリック・カレッジを解任されたことを聞くと、直ちにブラッドリーと6名の追隨者をブレドンス・ノートン農業園芸共同体に招いた。ブログ 'A Novel Club for Country Loving Girls' (post on 2018.12.15) The Garden Trust <https://thegardenstrust.blog/2018/12/15/a-novel-club-for-country-loving-girls/> にも詳細が記されている (2023年8月10日閲覧)。
- 注6 『ギルドについてのニュース』誌の1911年に毎号掲載された広告文は次の通りである：'Greenway Court, Hollingbourne, Kent, Miss EDITH BRADLEY (late Warden Lady Warwick College, Studly Castle) and Miss BAILLIE-HAMILTON. A FEW Resident Students are received for Instruction, practical and theoretical. In the work of a Small Holding, which consists of Gardening, Dairying Butter and Soft Cheese Making, Call Rearing, Poultry and Bee Keeping, Cramming Birds for Table, fruit Bottling and Preserving, Packing and Marketing. Riding and Driving Lessons also given. PROSPECTUS AND ILLUSTRATED BOOKLET ON APPLICATION. The Autumn Term will commence September 12th (『ギルドについてのニュース』, 表紙の裏, 1911)
- 注7 'Miss Handa and Miss Zabielski made a dear little pair of pussies, and pathetically lamented the shoes and ashes purporting to be all that remained of Miss Vriesendorp as Harriette' *Studley College Agricultural Journal*, 1907, p. 36.

【引用文献】

- 1) 2) 3) *Studley College Agricultural Journal*, Vol II-No 5, p.2, 1906 引用は筆者による訳である。
- 4) 5) *Studley College Agricultural Journal*, Vol II-No 5, p.3, 1906 引用は筆者による訳である。
- 6) 中目たき『思ひ出の記』協栄新聞社出版局, p.79, 1954
- 7) 8) Board of Agriculture and Fisheries, *Report of the Agricultural Education Conference: Agricultural Education for Women*, Board of Agriculture and Fisheries, pp.33-36, 1915. 引用は筆者による訳である。
- 9) Cohen, Susan, 'Hamilton, Lillias Anna (1858-1925)' *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford University Press, 2004 引用は筆者による訳である。

【参考文献】

- ・ Board of Agriculture and Fisheries, *Report of the Agricultural Education Conference: Agricultural Education for Women*, Board of Agriculture and Fisheries, 1915. 【Museum of English Rural Life, Reading University, Studley College Collection 資料番号 FR WAR 5/14/6所蔵】
- ・ Bradley, Edith and La Mothe, Bertha, *The Lighter Branches of Agriculture (The Womans Library)*, Chapman & Hall Ltd., 1903
- ・ Cohen, Susan, 'Hamilton, Lillias Anna (1858-1925)' *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford University Press, 2004

- ・ Coleman, Verna, *Adela Pankhurst: the wayward Suffragette 1885-1961*. Melbourne University Press, 1996.
- ・ Daniels, Stephen and Nash, Catherine, 'Lifepaths: geography and biography' *Journal of Historical Geography* 30-3, 449-458, Elsevier Ltd, 2004
- ・ Elliott, Brent, *The Royal Horticultural Society: A History 1804-2004*. Phillimore, 2004.
- ・ Hamilton, Lillias *A Vizier's Daughter: A Tale of the Hazara War*. John Murray, 1900.
- ・ Hamilton, Lillias *A Nurse's Bequest*, John Murray, 1907
- ・ Horn, Pamela, *Ladies of the Manor: How wives & daughters really lived in country house society over a century ago*. Amberley Publishing, 2014.
- ・ Horwood, Catherine, *Women and their Gardens: A History from the Elizabethan Era to Today*. Ball Publishing, 2010.
- ・ Meredith, Anne, 'Horticultural Education in England, 1900-1940: Middle-Class Women and Private Gardening Schools', *Garden History*, 31-1, 67-79, 2003.
- ・ Meredith, Anne, 'From ideals to reality: The women's smallholding colony at Lingfield, 1920-39', *Agricultural History Review*, 54-I, 105-121, 2006.
- ・ Opitz, Donald L. "A Triumph of Brains over Brute": Women and Science at the Horticultural College, Swanley, 1890-1910. *Isis*.104-1, 30-62, 2013.
- ・ Opitz, Donald L. 'Back to the land': Lady Warwick and the movement for women's collegiate agricultural education. *Agricultural History Review*. 62-1, 119-145, 2014.
- ・ Opitz, Donald L. "My Daughter of Ceres": Domestications of Agricultural Science Education for Women' in Opitz, Donald L., et al. eds. *Domesticity in the Making of Modern Science*, Palgrave Macmillan, 2016.
- ・ Page, Judith W. 'Gardening for Women: Frances Garnet Wolseley and the Rise of the Professional Woman Gardener' in Pagan, Page and Weltman-Aron eds. *'Disciples of Flora': Gardens in History and Culture*, 51-67, Cambridge Scholars Publishing, 2015.
- ・ Page, Judith W. and Smith, Elise L., *Women, Literature, and the Arts of the Countryside in Early Twentieth-Century England*, Cambridge University Press, 2021
- ・ Tachibana, Setsu "The "Capture" of Exotic Natures: Cross-cultural Knowledge and Japanese Gardening in Early 20th Century Britain' 『人文地理』 66-6, 4-18, 2014.
- ・ Tachibana, Setsu; Stephen Daniels and Charles Watkins, 'Japanese gardens in Edwardian Britain' in Nuala C. Johnson eds. *Culture and Society: Critical Essays in Human Geography*. Routledge, 109-139, (paperback edition), 2018
- ・ Taylor, Judith Mundlak and Bell, Susan Groag, *Women and Gardens: Obstacles and Opportunities for Women Gardeners Throughout History*, Taylor Hort Press, 2021
- ・ Verdon, Nicola, 'Business and Pleasure: Middle-Class Women's Work and the Professionalization of Farming in England, 1890-1939'. *Journal of British Studies*, 51, 393-415, 2012.
- ・ Warwick (Countess of), *A Woman and the War*, George H. Doran Company, 1916
- ・ Warwick (Countess of), Frances Evelyn Maynard Greville, *Life's Ebb and Flow*. W. Morrow & Company, 1929
- ・ アガサ・クリスティー (山田蘭訳) 『スタイルズ荘の怪事件』 創元推理文庫, 2021
- ・ 橘セツ 「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー：英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生」 『神戸山手大学紀要』 第8号, 89-106頁, 2006
- ・ 橘セツ 「世界漫遊旅行者と庭園：エラ・クリスティーの日本旅行とコウデン城の日本庭園造園」 『神戸山手大学紀要』 第10号, 31-49頁, 2008
- ・ 橘セツ 「1950年代に活躍した英国人著述家マージェリー・フィッシュによる庭園の語りから試みるホームとジェンダーをめぐる庭園の文化地理学」 『神戸山手大学紀要』 第18号, 43-57頁, 2016
- ・ 橘セツ 「英国人女性画家エブリン・ダンバーの描いた戦時のガーデニングとジェンダーをめぐる文化地理学」 『神戸山手大学紀要』 第19号, 49-68頁, 2017
- ・ 橘セツ 「英国貴族ウォリック伯爵夫人フランセーズ・イヴリン・グレヴィルの社会思想と女子農業・園芸学校の創立」 『関西国際大学研究紀要』 第24号, 85-100頁, 2023

- ・ 中目たき『思ひ出の記』協栄新聞社出版局, 1954
- ・ 星珠枝・橘セツ「園芸家半田たきの明治後期の英国留学：家族史とライフヒストリー／ライフジオグラフィーの視点から」『神戸山手大学紀要』第13号, 79-111頁, 2011
- ・ 一次資料:『女性農業タイムズ *The Woman's Agricultural Times*』(1899 VolII-No1-1905 VolVI-No 3);『スタッドリー・カレッジ農業ジャーナル *Studley College Agricultural Journal*』(1905 VolI-No1-1908年 Vol III- No12);『ギルドについてのニュース *News about the Guild*』(1910-1954) 【以上 Museum of English Rural Life, Reading University, Studley College Collection 資料番号 FR WAR 5 所蔵】